

浄土

10
1994

覚悟して布施を

田中雅博

旅

立山、黒部アルペンルート 夏 攸吾

新連載

楽屋ゆかた 関 容子

好評連載

吉川英明 稲葉小太郎 須藤隆仙

民話が語る老いと救い 松谷みよ子



法然上人鑽仰会発行

は
じ
め
に
押
し
て
ね、
0
0
8
8。



ゼロゼロ押したら ハッピーハッピー

0088

日本を楽しくする電話

お申し込み・お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎0088-82 (無料) / ☎0120-0088-82 (無料)

■受付時間 9:00~23:00 (年中無休)

0088なら●月々の基本料金は一切かかりません。ご使用になった通話料金
だけのお支払いです。●かけ方は簡単。現在お使いの電話機で、市外局番
の前に*0088*を押すだけ。●60kmを超える市外電話は0088がおトク。

写真 夏
攸吾

雲と花

立山、黒部アルペンルート

大観峰から黒部湖を望む





弥陀ヶ原のお花畑



チンゲルマ



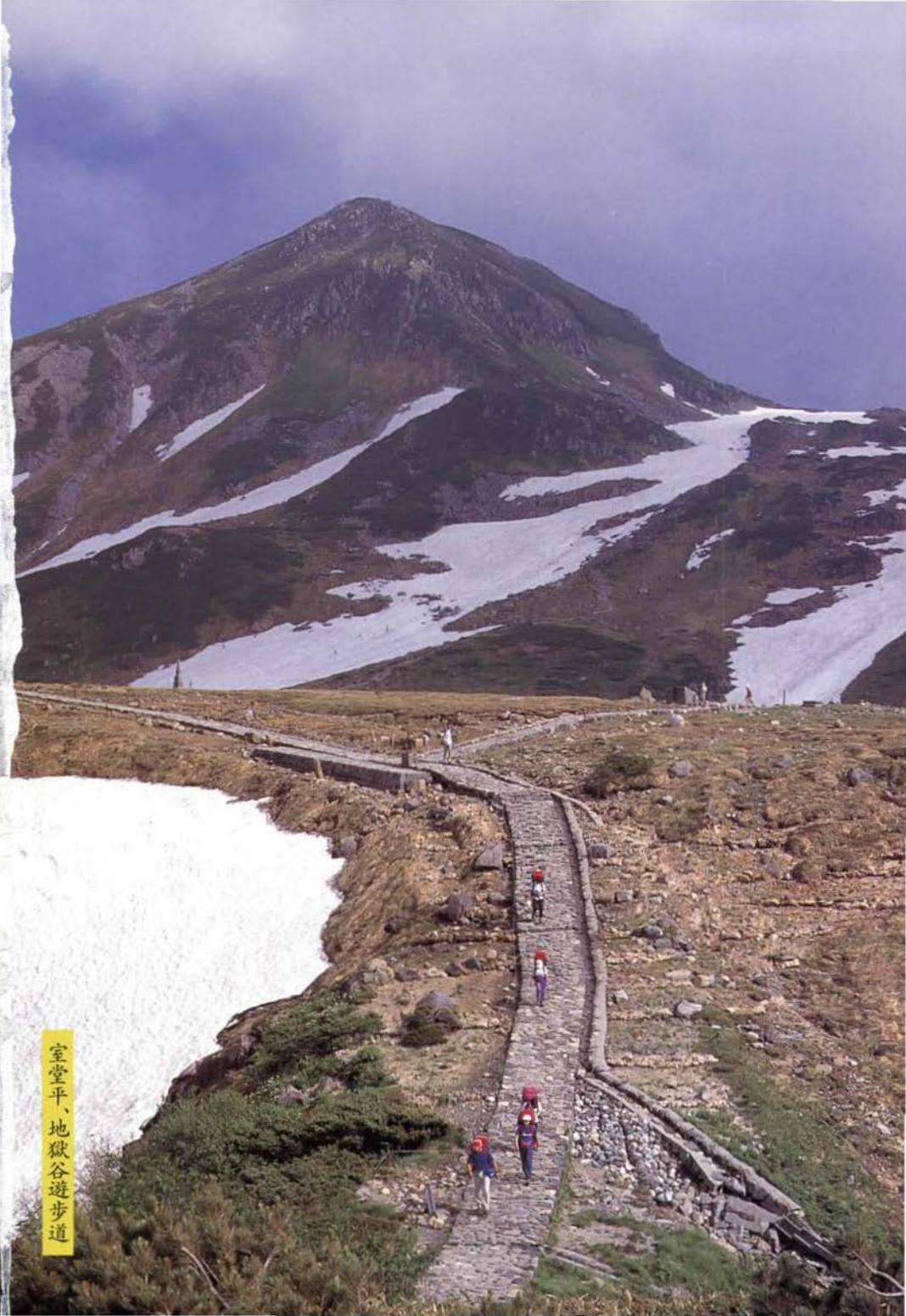
タテヤマリンドウ



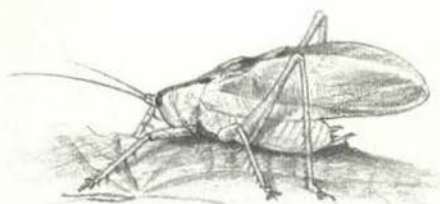
シナノキンバイ



室堂平、地獄谷遊歩道



浄土



1994/10月号 目次

〔カラー口絵〕雲と花——立山、黒部アルペンルート——写真=夏 攸吾	3
覚悟して布施を——僧侶の皆さんアイ腎バンクに入りましょう——田中雅博	8
憧れのチングルマ——立山、黒部アルペンルートを往く——…夏 攸吾	16
午後の日差しの中で——⑨	
煙が ³ 気に障る	吉川英明 24
楽屋ゆかた——①	
中村(万之丞改メ)吉之丞(一).....関 容子	32
現代の快僧——その8	
ほんとうの葬式	稲葉小太郎 38
念仏信仰の系譜——中国編——③.....須藤隆仙	50
民話が語る老いと救い.....松谷みよ子	58
編集後記.....	70

表紙題字=浄土門主 中村康隆貌下
表紙撮影=落合泰三
目次・編集後記イラストレーション=田村直巳

覚悟して布施を

田中雅博

僧侶の皆さんアイ腎バンクに入りました

我ら僧侶は、仏教の理想を理解し素晴らしいと思つて受戒しました。喜んで布施の行をさせていただきます。私の眼は我が所有ではありませんから、喜んでアイバンクに入らせていただきます。私の腎臓も我が所有に非ず、喜んで腎バンクに登録いたします。そして、私の眼や腎臓の移植を受けることによって、衆生の苦が少しでも除かれんことを祈願いたします。



サイエンスとヒューマニズム という二つの批判

知識は言葉によって人に伝えられます。そして現代社会には言葉が溢れています。私たちはたくさんの方々の言葉の中からの言葉を信頼した方が良いでしょうか。そこで「批判」が必要になります。批判には「間違い探し」と「良いものを選ぶ」という二つがあり、サイエンスとヒューマニズムに対応しています。

近代医療の根拠としても二種類の文献があります。サイエンスの論文とヒューマニズムの文献です。モダン（近代）という言葉はルネッサンスのヒューマニストたちによって造られたようですが、彼らが行なったように、古典を研究し如何に生きるかを考えることがヒューマニズム

（人文学）という言葉の原義のようです。ヒューマニズムに加えて、もう一つ近代を特徴づけるものがサイエンスです。

これらサイエンスとヒューマニズムは、厳しい批判である点が共通しています。しかし、そこで使われる言葉はまったく異なっています。

サイエンスでは、一義的に定義した解釈不要の言葉を用いて、反証可能な論文を書きます。自分の間違いが検証できる形で提出された論文の集積がサイエンスなのです。ですから、膨大な数の現代医学の論文は、何らかの意味で前の論文を否定するものです。そしてその論文もまた何時の日か否定される運命にあります。サイエンスとしての近代医学は「インデックス・メデイクス（医学論文索引）」に載っている医学論文の全体」ということができるでしょう。

一方、古典の研究であるヒューマニズムでは、言葉のほうに先が与えられています。それらの言葉は多義的であって、追体験という解釈が必要です。ここでは、真か偽か検証される言葉ではなく、行為としての言葉が重要です。

医療の問題で、その答の真偽が検証可能な場合には、サイエンスが最も信頼できる根拠となるでしょう。世界中の医学会での批判に晒されて、反省を繰り返しているからです。しかし、反証不可能な問題に対しては、サイエンスは無力です。例えば、「必ず死ぬ我が命を如何に生きるか」という問題は反証不可能ですから、答が一人一人違って当然、ということになります。そして、長い歴史という厳しい批判に晒され、選ばれて読み続けられる多くの古典に、人の生き方の理想の数々を見いだすことができま

す。

多くの古典に認められる「人の生き方の理想」の特徴の一つに「自己の命を超えた理想」というものがあります。もしも自分にとって自分の命よりも大事な価値あるものがあつたなら、それはその人の宗教です。ここでは、宗教という多義的な言葉を、この条件をみたす本人の理想という意味で用いることにします。例えばプラトン著『ソクラテスの弁明・クリトン』に示されているソクラテスが命を捧げた理想「フィロソフィア」はソクラテスにとつての宗教です。ソクラテスの心の中から呼びかけてくるダイモンは、お釈迦様に呼びかける梵天がお釈迦様の宗教ではないように、この意味では宗教ではないでしょう。ダイモンと天とは言語学的にも共通するようです。

ヒューマニズム(人文)の問題

警告知、尊厳死、臓器提供などの非合理的な問題に関して、反証不可能であるからサイエンスはほとんど役に立ちません。このような非科学的な問題を考えるときこそ、古典(歴史)によって批判された文献が役立つものと思います。

梵天勸請説話と警告知

釈尊が悟りを開いて間もない頃、人々に、その悟りの内容を話すことを躊躇されていた。その時に梵天が現われて「どうぞ説法してください」と勧請したという。この説話には、癌の告知という現代の問題と共通するものがあると思います。逆に、悪魔が説法を思い止まらせようとしたという説話もあるようですが、どちらの場合にも、共通するのは説法を躊躇したということ

です。躊躇したということは、二者択一すなわち分別を迫られたけれども、分別智では解決できない状況であったことを示しています。

話すべきか、話さざるべきか、必ず死に至る癌の患者さんに病気の説明をするかどうか、二者択一が困難です。私は患者さんが聞きたいと望んだ場合には、知っていることを隠さずに話すようにしています。その患者さんの同意があれば近親者に付き添ってもらって、一緒に患者さんの病気についての説明を聞いていただきます。治る可能性のない癌であることは、大切な自分の命にかかわることだから、これを知らされないで良いわけがありません。しかし、自分が癌であって、もう短い時間しか生きられないと知ったら苦しむことになります。真実は人を助けず、逆に苦しめてしまう。釈尊が自分を含め

て人は必ず死ぬということを覚悟された後、これを説法することに躊躇されたのも、このような非合理の故であつたと思われます。梵天勸請説話によれば、お釈迦様は、人々の苦しみを和らげようとする心「悲」に縁つて、説法を決意

されたようです。そして「耳ある者たちに不死（甘露）の門は開かれた」と続きます。答えが「不死」ということも、問題が「死」であつたことを裏付けています。四門出遊に示されているように「人は皆、年老いるか病氣になつて、必ず



死ぬ」という苦しみが、お釈迦様の問題でした。

梵天よ、人を害すると想って、私は妙法の説法を躊躇したのだ。

お釈迦様のこの言葉にあるように、真実は人を害する。癌の告知は人を傷つける。しかしその厳しさは同時に、死を覚悟した人に真の思いやりや優しさを獲得する機会をも与える。釈尊は以後の一生、悲の行ない（方便）として言葉を用いて、それ以外の時は沈黙されたようです。

四諦と尊厳死

本人の希望で延命医療を中断しても良いという根拠はあるでしょうか。

シヨウベンハウエル『自殺について』によれば、自殺を犯罪と考えているのは、一神教の即ちユダヤ系宗教の信者たちだけである。ところが旧約聖書にも新約聖書にも、自殺に

関する何らの禁令も見出されえない……一体誰にしても自分自身の身体と生命に關してほど争う余地のない権利をもっているものは、この世にはかに何もないという事は明白ではないか

という。經典『サンユッタニカーヤ』のゴーディカ尊者の例から、仏教が僧侶の自殺は認めていたことがわかります。デュルケーム『自殺論』に、仏教は……、自殺を宗教的慣行にまで仕立てあげたとよく非難されるが、実際は仏教はむしろ自殺を非とした、……涅槃……は生きている間に得ることができると、また得なければならぬ

とありますが、この解釈は正しいと思います。『転法輪經』などによれば、お釈迦様は苦集滅道の四諦を説かれた。ここで伝統的に苦と翻訳され

る「dukkha」は「思い通りにならない」という意味のようです。生老病死他の四苦八苦が生まれる原因は「愛欲と生きる欲望と死の欲望の三つである」と説かれた。これらの欲望が制御された状態が涅槃であり、思い通りにならない四苦八苦を思い通りにしようと苦しむのを止めて、思い通りにしたいと思う自分の心のほうを制御する。したがって仏教の僧侶は、自殺を望みはしないが、生きることにも執着しないのであり、これは尊厳死の立場と共通すると思います。しかしこれは僧侶の場合であって、すべての人に尊厳死を勧める訳ではありません。他人に対しては慈悲を实践するのが仏教だと思います。

三法印と臓器提供

次に臓器提供につながる「布施」の根拠を考えてみます。我が所有と執着せずに人々に分か

ちあう「布施」は、「無我」という理想の実践でしょう。我が無いという意味ではなく、我と思っているものに対する執着を離れることを積尊は説いたようです。

比丘達よ、色は無常である、無常なるものは苦である、苦なるものは無我である、苦なるものは我が所有にあらず

比丘達よという呼び掛けから、これが仏教僧侶に対して語られたものであることがわかります。「色」は、四諦の四苦八苦の最後にある五つの執着の一つで、身体のことです。この身体は無常なる（年老いて消滅する）ものです。無常なるものは苦なる（思い通りにならない）ものです。私の思い通りにならないものは私のものではありません。

したがって、仏教の僧侶は、身体を我が所有

と執着せず、生命が無くなる時には臓器の提供を願うはずです。なお、この場合も僧侶が対象（比丘達よ）であって、人々に一律に臓器の提供を呼びかけるようなことは仏教では行ないません。これが対機説法です。臓器移植を受けて生きたいと思う人の願いを、仏教の慈悲の理想は肯定するのです。

菩提心を因とし、悲を根本とし、方便を究竟と為す

菩提は悟り、すなわち自己が必ず死ぬ存在であることを覚悟して、我への執着から自由になることでしよう。我への執着から離れた人は、他人の苦しみも自己の苦しみと同じように除こうと思う。このような本当の優しさ思いやりの心は、癌告知を受けて残り少ない命を生きている患者さんに、しばしば認められます（僧侶の

真の師は、先生よりも先死でしよう）。そして、この、他人の苦しみを除こうとする心「悲」を根拠として「苦しむ人々に近づく」方便こそが、梵天勧請説話以来の仏教の理想だと思っています。最後にシヨウベンハウエルの言葉を引用して、我々僧侶への戒めとさせていただきます。

……仏教徒の僧院生活もまた同様で……純粋な僧侶は最高の榮譽に値する存在である。けれどもほとんど大抵の場合僧衣は単なる仮装なのであり、この仮装のかけに本当の僧侶がひそんでいることは恰も仮装舞踏会の場合におけると同じように稀なのである。僧衣は仮装ではありません。僧侶の皆さんアイ腎バンクに入りましょう。

（真言宗豊山派本山特派布教師、阪東甘番札所 益子西明寺住職、西明寺普門院診療所内科医師）

立山町、黒部湖



憧れのチングルマ

—立山、黒部アルペンルートを往く—

文と写真—夏 攸吾

山靴に微^{かひ}を生やした男

松本まで、中央本線の特急「あずさ」
車中で、山姿の乗客を横目にずっとビ
ールを飲んでいた。大糸線に乗り換え

ると、凝縮されて山屋の比率はさらに
増す。窓外の北アルプス連峰に静かな
闘志の目をむける山男たちに混じり、
私は異端者の姿勢くずさずビールを飲
みつづけ、信濃大町の駅に降りたとき



大町温泉郷 薬師の湯

には、ざまあみやがれ、少し千鳥にな
っていた。

山をめざすバスに、乗ることは乗っ
たが、私だけひとり大町温泉郷に途中
下車、共同浴場「薬師の湯」の露店風
呂に飛びこむ。

ここには河昌かわしょうという畳ひじきの宿があり、
少々高いが、いまだきぜいたくな平屋
造り、料理がうまくて、もてなしもい
い。ひさしぶりに挨拶に寄ったのだが、
改装の工事中で、女将には逢えなかつ
た……。

湯に浸かって遥かに高い山を眺めな
がら、またビールだ。かつては私もは
しくれの山男だった。けれど、苦しん
で頂きをきわめることが、なぜかしら
ん阿呆らしくなり、山靴に微を生やす

ことになった。以来、頂上で喉を潤し
たビールを、麓で浴びている。

落ちこぼれ、だがやはり、山は好き
なのだった。さんざん逡巡したあげく、
むかしの恋人に逢うような気分て、山
に入る。

立山黒部アルペンルート。ご存じの
とおり、地図を見ただけでも足のすく
むような立山連峰の難関を、人智の限
り尽くして楽々と踏み越えてしまう最
大級の山岳観光ルートだ。

自然環境保護のため全線、自家用車
の通行禁止だが、私のようなグータラ
にはおあつらえむき、山靴なしで高山
を体感できる。

関西電力のトロリーバスが、専用の
長いトンネルを行き、途中に破砕帯の

黒部ダム



表示がある。

破碎帯は軟弱な地質帯のこと、建設工事にとつてはもつとも厄介な障害。わずか八十メートルの間を突破するのに七カ月を要したという……。

暗いなかで、長野県から富山県へ。地図に記された県境のマークが一瞬、頭をよぎる。

巨大な要塞然とした黒部ダム。

放水の轟音と谷おろしの風が、観客の歓声を吹き散らす。今夏の水不足、渇水列島を証明するように黒部湖の水位が低い。

標高一四五四メートルの黒部ダムから、地下ケーブルで一八二八メートルの黒部平へ、さらにロープウェイで二

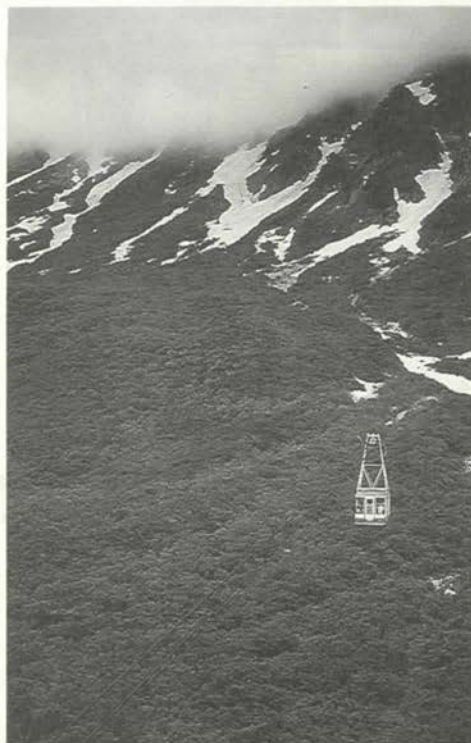
三一六メートルの大観峰^{だかんぼう}へと登る。

この日、天候は願ってもないほど上だったが、油断はならない。不意に、強風に見舞われたり、雲にまかれたりする。

私には風の怖さが身にしみている。高い尾根道の縦走路で烈風に襲われ、前に行く友の姿がフツと掻き消えたこともあった……。

山では雲や霧も怖い、道を見失ったら命にかかわる。現に、いま大観峰はきれいに晴れているのに、これから向かう室堂平の模様を伝えるビデオ映像は、霧で真っ白だった。

「日本の屋根」のどてっ腹に、文字どおり風穴ぶち抜いた立山トンネルを、バスで抜ける。



黒部平から大観峰へのロープウェイ

標高二四五〇メートルの室堂まで、三・六キロのこのトンネルこそがアルペンルートの鍵だった。高山の厳しい気象条件、とくに気圧差と豪雪に悩まされ、さらにここでも五十メートルの破碎帯に阻まれながら、ようやく昭和四十四年十二月に貫通、念願の富山と長野を結ぶルートが完成した。

おそらく世界一の高所に開かれた自

動車トンネルであり、日本ではもう二度とこんな大工事が行なわれることはないだろうという、立山トンネルのなかで上下のバスがすれちがう。待避所のちょうど真上あたりに、三〇〇〇メートルを超える立山の峰々があるのだった。

室堂は乳色の霧の海……状況は好転しておらず、私はあきらめて「雲の上のリゾートホテル」、ホテル立山に靴を脱いだ。

お花畑はチングルマだらけ

いまでこそスポーツ登山と観光の立山だが、その昔は白山・富士山とともに並び称された日本の三霊山、敬虔な信仰の山だった。

雲の上のリゾートホテル
ホテル立山のロビー



しかも立山には、他に類を見ない特異な信仰形態があった。それは、おなじ山の中に地獄の世界と、対極の極楽浄土世界とが想定されたこと。立山開山縁起によれば、山麓芦峯寺の武士、佐伯有頼が、熊に姿を借りた阿弥陀如来の導きで発願したことになっている。

有頼がのちの開山、慈興上人。ちなみにアルペンルートを開いた立山黒部貫光の初代、佐伯宗義はその末裔にあたる。

そうして、立山信仰の布教には立山曼荼羅が偉力を発揮した。その成立には中世後期、北陸地方に広まった浄土真宗、親鸞や蓮如ら高僧の絵伝制作、
「絵解き」の影響があると見られる。

ということはその根底には、称名念仏の開祖、法然上人への渴仰もあるわ

けだ。

立山山中に残る地名の数々が、そのあたりの事情をつぶさに物語る。称名滝、弥陀ヶ原、地獄谷……などなど。

さて、翌朝は気持ちよく晴れてハイキング日和。グータラな私も少しは歩いてみたい気分になられ、きれいに整備された室堂平の散策コースにでた。とたんに、すっかり暗茶色の夏羽になった立山のシンボル、雷鳥と出くわす。幸先がよすぎて、どきまぎする。

まだたつぷりと雪が残る、みくりが池から地獄谷。しかし、ときは七月下旬、高山植物の花盛りにはまだちと早い室堂平だった。

おまけに、もとはしくれの山男には、



あまりにも気になる観光客たちの無防備な軽装、とくに足もとが危なっかしくて見ちゃいけない。自然環境がどうのというけれど、人と自然との距離は広がるいつばうに想える。

お花畑をもとめて、標高一九八〇メートルの弥陀ヶ原まで下りてみた。この夏、新装なったばかりの弥陀ヶ原ホテルから延びる本道の散策路、踏みしめる周囲に清楚な高山植物の花、花、花……。最初にチングルマを見つけて、私は歓声をあげた。

よくご存じの方は笑われるかもしれない、が、私にとってはまったくの処女遭遇、憧れのチングルマだった。白い、丸っこい花卉が愛らしい。「いいね、いいね、かわいいね」、カメラを構



える手がふるえた。なぜなら私にとってチングルマは、いつのまにか、滅多に見られない聖域の花になっていたか

らだ。

ところが残酷なことに、私にとつてはそれほど貴重で可憐なはずのチングルマが、その後も木道の両側あちこちに悪戯っ子のように現れ、そのうちに私は、あろうことかすっかりチングルマに飽きてしまった。

私ら青春のころには、文通という初で秘めやかな交際があった。逢わずにはいられない、でも逢わなければよかった、そんな罪な心境を味わうこともあった。まさか、またそんなことになるうとは、夢にも想わなかった。

それほどいい時期に、私は弥陀ヶ原を歩いたことになる。いま手帳をひもとくと、コイワカガミ、ミツバオウレン、シヨウジヨウバカマ、イワイチヨ



地獄信仰の一つ弥陀ヶ原の
ガキの田

ウ、タテヤマリンドウ、ゼンテイカ、ミヤマクワガタ、シナノキンバイ、ミヤマキンボウゲなど、およそ三十種あまりの高山植物の花をこの一時に見ているのだ。

そのいちいちを接写レンズで撮りおさめ、私には花あたりみたいない一日だった。

不幸にして醒めたチングルマへの恋心は、タテヤマリンドウという新たな憧れを生み、異性に抱く好み、美少女から年増に移ったときのようなシヨックがあった。

たぶんこれは私の、このひと夏のいたずらな、熱帯夜の夢のごときものだろう……。その夜、弥陀ヶ原ホテルの夕食に根曲がり竹の子がでてた。塩

をふって炙っただけの、素朴な味わいがなにより良かった。私ややつぱり、おとなしく食べたりやいいのかも知れない。が、立山の自然と初めてじっくりとつきあった、満足感もはかりしれないくらい大きいのだった。

願わくば読者諸兄にも、ぜひ一度こんな体験をしていただきたい。実をいうと立山黒部アルペンルートは、「気軽に通り返けられます」という宣伝の効きすぎたきらいがあり、ほんとうになにも見ないで通りすぎる人があまりにも多い現状なのだ。

そうして、もうひとこと付け加えればこのルートは、やはり立山連峰を正面に見すえ、富山から大町へとたどるのが正しいと思う。

午後の日差しの中で

〈第九回〉

煙が氣に障る

吉川英明



先日、赤坂見附で地下鉄の階段を下りて行ったら、「構内終日禁煙」という新しい表示が目についた。思わず内心、ざまを見ろとほくそ笑んだ。

かくいう私は、五年前から禁煙している。地下鉄の駅が禁煙になったところで痛くも痒くもない。ニコチン中毒共め、思い知ったか、という心持ちなのである。

どうも禁煙に成功して以来、喫煙者に対して、いわれのないほどの優越感と敵愾心が、私の心に巣食っているのだ。

「まだまだ、羨ましいいんだろ」

周りこそ言うが、そうではない。五年も経った今では、煙草は恋しいどころか、あの匂いそのものが嫌いになっている。

だが、私が煙草を目の敵にするのはそれだけ

が理由ではない。私が禁煙に挑戦した時、周囲から受けた様々な妨害やあざけりの記憶が、怨念となって根底にあるのだと思う。

私が、禁煙を決意したのは、八年前、四十七歳の時だった。

大体、この年ごろになると、周囲も、出来れば煙草をやめたいとは思ってはいるものの、なかなか踏み切れないという連中が大半である。それまでに何回か試みて失敗したという苦い経験を持つ者も少なくない。

彼らは、禁煙の難しさを知っているから、表面では、やめる気はないなどと嘯きながら、こっそりと本数を減らしてみたり、ニコチンやタールの少ない銘柄に切り替えるなど、いじましい努力を続けている。

そういう連中にとって、仲間内から、すんな

りと禁煙に成功する奴が出るということは、甚だ面白くないことに違いないのだ。

やめるに当たって私は、人との付き合いを避けるため、五月の連休を選んだ。

ゴルフにも行かず、友人達とも会わずに五日ほど煙草を絶った後、禁煙指南書の教えに従って、会う人ごとに禁煙を触れて回った。

すると、大抵、

「ふん……」

と、軽蔑したような反応が返ってくる。皆、私が一日八十本も喫っていることを知っているから、

（お前にやめられるわけがないよ）

という冷笑なのだ。

だが、その目の奥には、一様に、

（しかし万が一ということもある。これは何と

午後の日差しの中で

か阻止せねばならぬ)

という底意地の悪い光が宿っているのを、私は見逃さなかった。

私の禁煙を阻むための迫害と妨害は、様々な形でやってきた。

無論、原稿を書いたり、読書をしている時の衝動も並みではないが、それは、水をがぶ飲みするという方法で、ある程度凌げる。

やはり一番辛いのは、仲間内で酒を飲む時である。そういう時、ニコチン中毒者の群れは、私を取り囲んで燻しにかかる。ただでさえ、本数の多い連中が、絶え間なく煙草を啜えて、私の顔に煙を吹き付ける。

禁煙して十日とか半月というころ、正直言つてこれは堪えた。飲むほどに酔うほどに、燻製のように乾きかけた身体の奥で、脳味噌がニコ

チンを求めて悶えるのだ。

だが、歯を食いしばってそれに耐え抜いたのは、禁煙に入ってから間もなく、

(これは、やめる価値があるわい)

という感動的な体験をしていたからであった。

あれは、禁煙後ちょうど一週間目だったと思う。六本木のある小料理屋で、口をつけた酒のうまさに私は驚嘆した。

「こらあ、うまい酒だな……何ていう酒？」

私が思わず大声で訊くと、

「え？　うちは普通の菊正ですが……」

と、馬鹿にしたような板前の声が、カウンターに向こうから返ってきた。

(可哀想にこの客、ろくな酒飲んだことねえな)とでもいうような、板前の視線も気にならず、私は有頂天になっていた。

(煙草をやめたせいだ。日本酒は、本当はこういう味がするんだ)

そう思った途端、さほどの高級店でもないその店の、刺し身も焼き物も漬け物も、出てくる何もかもが、天上の美味に変わったのだ。食い



しん坊の私が、絶対に禁煙を成し遂げるぞと決意したのはまさにこの時だった。このときの感動が、寄ってたかつての妨害から私を守ってくれたのだ。

それでも、危うく奸計に引っかけ、禁を破りそうになったこともあった。

ある結婚披露宴のことだった。

退屈なスピーチが長々と続いてやっと終わり、乾杯のシャンパンで喉を潤して座り直すと、丸いテーブルの周囲から、はっと解き放たれた私語と紫煙が一時に吹き出した。

はっと気がつく、いつのまにか私も、右手の指に煙草を挟んでいる。右隣に座った友人が、さり気なくライターの火を差し出した。

私が、怖じ気を振るってタバコを放り出すと、「惜しかったなあ、もう少しだったのに……」

と、そいつは悔しがった。

そいつは乾杯の後、すかさず、半分ほど箱から引き出した煙草を、丁度私の右手が行く通りに、罌のように仕掛けたのである。

反射的に放り出したものの、この時は、

(一本だけ喫ってみようか、一本だけ)

という囁きが、宴の終わるまで耳から離れなかった。

一番きつかったのは、一ヶ月を過ぎたころだった。

とにかくその日は、特に禁断症状が強く出て、ぼうつとしていたに違いなかった。

まず家を出て、バスで駅まで行ってから、私は、スーツの上下が違うのに気がついた。同じ紺系統なのだが、色の明るさも生地もはっきりと違うから、どう見てもおかしい。面倒くさか

ったが、家に戻って着替えてから出直した。

そして渋谷まで行き、買いたい本があったので、ビルの地下にある書店へ行った。

書店に入ろうとした刹那、私は、顔面に強烈な一撃を食らって仰向けにぶっ倒れた。

動転して、一瞬、いやしばらくの間、何が起きたのかわからなかった。

だが、のろのろと起き上がりながら、頭が回転し始めると、ことの次第はすぐにわかった。

分厚いガラス戸が閉まっているのに気付かず、顔面から突っ込んで行ったのだ。

そうわかれると、途端に恥ずかしくなり、周りを見回したが、幸い人はいなかった。

今度は顔が心配だ。右の眉の辺りと、鼻柱がひどく痛む。鼻血でも出てないかと撫で回したがそれはなさそうだった。

手洗いへ駆け込んで鏡を覗き込んだ。見た目は何ともなかったが、押すと疼くように痛い。

これは腫れてくるなと思っていたら、案の定しばらくすると喧嘩で殴られたような顔になり、

二、三日の間、人に会う度に弁解するのに苦労した。

そんな禁断症状の苦しみも、三ヶ月を過ぎるとぐっと楽になった。これで禁煙出来たぞと思つたのは八月に入ってからのことだったが、ことはそれほど甘くなかった。

ちょうど旧盆のころだった。古くからの友人の家に夕食に招かれ、二人ともしたたかに酔つた。彼は、相当なヘヴィースモーカー、それも両切りのピース党である。

私は、煙草を喫う彼を面と向かつて馬鹿呼ばわりし、そのうち肺癌になるぞと説教した。す

ると、彼は、お前の禁煙が本物なら、一本ぐらい喫っても平気だろうと、缶ピースの開けたてを私の鼻面に突きつけた。

「何だ、こんなもの……」

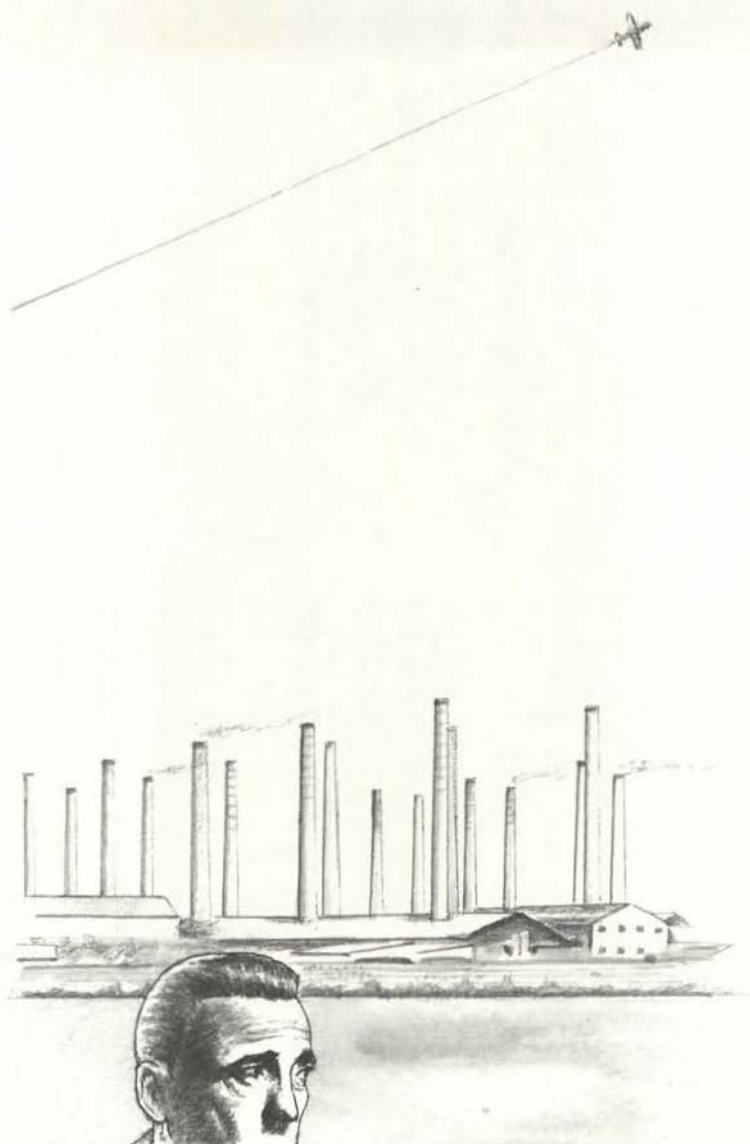
事実、自信もあった。だがそれにも増して、開けたばかりの缶ピースの蕩けるような芳香に魅せられて、一本だけならと思つたのが、その年の私の禁煙の終わりだった。

それから十ヶ月、私は以前のようにタバコを喫い続け、翌年の五月の連休に、再び一念発起した。

また禁煙したと言うと、今度は皆、馬鹿にしたように激励の言葉を返してくれた。

今に見てろと思いつつ、また八月まで耐えながら、今度は、ころりと自分に負けた。

私は、下手くそながら風景写真を撮るのが好



きて、その時は、機材を車に積み込んで、群馬
白根から万座へ行った。

白根山は人が多くて写真にならず、あきらめ
て万座から草津の方に下って行く途中、道端の
朽ちかけた薪小屋の脇の日溜りに、コスモスが
咲き乱れているのが目についた。

小屋の腐った板壁と、コスモスの花との対比
が美しく、何枚も写真を撮った。

そして、撮り終わった時、何故か無性にタバ
コが欲しくなった。抗い難い衝動だった。

前回の挫折が頭をかすめたが、今度は昼間だ
し酒も飲んでいない、などと勝手な理屈をつけ
て、自動販売機で煙草を買った。

見晴らしの良いところまで車を走らせ、微風
の吹き過ぎる道端の木陰に座り込んで火をつけ
た。

くらっと目が眩んだ。瞬間、空気はどこまでも
澄み渡り、八月の陽光の中で木々が輝きを増し
た……あの時の煙の味は生涯忘れないだろう。

それでも、一本だけ抜いた残りの煙草は、箱
ぐるみ雑木林に投げ棄てるという意志の強さを
見せてその場を去ったのだが、その一時間後、
私はまた自動販売機の前で車を止めていた。そ
のまま運転していることに、生命の危険を感じ
たのである。

それからまた十ヶ月喫い続け、あざけりに耐
えながら、明くる年の五月に始めた第三次禁煙
計画でやっと念願を果たしたのだ。あれから五
年、今や如何なる妨害や誘惑にも耐えられる自
信はある。

だから、どうにも、煙草の煙は気に障る。

(作家)

楽屋ゆかた

その一

中村(万之丞改メ)吉之丞(一)

関 容子



女方の万之丞が二代目吉之丞を襲名すると聞いたときは、ちよつと戸惑いがあった。万之丞は白鸚(八代目幸四郎)が東宝へ行っていたころ「桑名屋徳藏」で美しい舟遊女の亡霊楡垣(ひがき)

という大役をつけられ、白鸚の相手役を立派につとめたことが観客の記憶に残っているし、最近でもたとえば「吃又」の土佐将監北(しょうげん)の方のような品のある役どころの女方だからだ。ところが先代吉之丞という役者は、播磨屋の大番頭と言

われた面白い持ち味の人で、初代吉右衛門が熊谷ならば梶原、大藏卿なら解解由(かいげゆ)、法界坊なら番頭長九郎、河内山なら北村大膳、というのが持ち役だった。

吉之丞襲名が決まったとき、今の吉右衛門は記者会見で、先代吉之丞のイメージは万之丞と必ずしも重ならないが、従来何々之丞という名前は女方のものだし(古くは瀬川菊之丞とか尾上多賀之丞とか)、播磨屋にとって大きな名跡を継

いで幹部に昇格し、たとえ役者の子に生まれなくても努力次第でこういうこともあるのだというふうに他の励みにしてもらえれば、と述べた。

そのときに吉右衛門が使った「歌舞伎ドリム」という言葉がとても印象深かった。しかし私は私なりに、吉右衛門が前名の万之助を卒業して二代目吉右衛門を継いだように、万之丞の長年の努力に報いるために、自分同様「万」を「吉」に変えることを思いついたのではないかと想像して、ちよつと感慨にふけっている。

中村万之丞改メ吉之丞。屋号は播磨屋。昭和七年東京生まれ。蝶丸、吉三、万之丞を経て、平成六年九月歌舞伎座で二代目吉之丞を襲名披露。

襲名を間近に控えた七月の炎暑の日、国立劇

場で歌舞伎俳優養成課の研修生に教えている万之丞を訪ねた。「助六」の三浦屋格子先に居並ぶ傾城役の稽古だった。

「ひと目千本の眺めより、眺めに飽かぬ仲野町……」

というせりふがうまく言えない研修生がいて、次の人になかなか進まない。浴衣姿の若者が十人ほど稽古場の広間にズラリと横一列に立ち、その向かい合せに万之丞が座卓の前に座っている。

「傾城らしい連ねのせりふは、語尾を上げ気味に張り上げて言うんですよ。声を裏へ切り換えると楽ではあるけれど、なるべく裏声は使わないように。ほら、小鼻を開くからそういう声になるんですよ」

と、物腰は優しいが、指摘する事柄は厳しくて当を得ている。万之丞がお手本にせりふを言



五歳のお祝い。当時母と姉と神田三崎町近くに住んでいた。

ってみせると、朗々として色っぽい。

「ちよつとねえ、その揚巻さん、のきの字はあんまりはつきり言わないの」

という小言で、さすがに東京生まれの役者、と思った。関西の私の友人はいつも私をせきさんと、せときを等分に棒読みする。言葉は国の手形、「助六」の傾城たちにはやっぱり江戸ふうに発音してもらいたい。

研修生たちはみんな素直で一生懸命。今日の

稽古はそこまで、となった。

場を改めて、万之丞の生い立ちについて訊く。

「あたしは七人兄弟の末っ子で、母はあたしをおなかに持って父と夫婦別れしているんです。

父は神田美土代町みとしろちやうで板金業……ブルキ屋をやっておりました（ブルキ屋のこと）。兄たちはみんな

父のほうへ行つて、母と姉とあたしと、母が

生計を立てるために開いたおでん屋のお手伝い

さんたちと、男つけがまるでありませんでした

から、女の言葉が日常会話だと思つて育ちまし

た。学校へ行くようになって、そこであたし、

つて言つたら、やあいおとこ女、つて笑われて、

聞いているとみんなおれとかばくとか言ってるん

ですね。おれというのは無理だけど、ばくなら

何とかなりそうで、小学生のときだけは、ばく、

でしたですよ。あたくしは（笑）」

万之丞の語り口はおだやかで丁寧だが、声自体は男っぽいところに独特の味わいがある。笑うときの軽く会釈をするような仕草は、いかにも女方のものだ。

「母のおでん屋は水道橋の近くの神田三崎町で、店の名は玉川でした。というのも、母は府中の出で、多摩川の近くで育ったからでしょうけれど、屋号の字は玉子の玉の字を使っておりまして。そのころは姉が看板娘で、女衆も三人いまして、かなり繁昌しておりました。ところがあたしが小さいころは病弱で、年柄年中熱を出してましてね、五つのときに、子供のくせに糖尿病になったんですよ(笑)。あたしは好き嫌いが激しくて、人參午朮なんて見ると涙が出てくるくらいいやでして、おでんの中の豆腐とかがんもどきとか、せいぜい食べても大根とかね。昔は店で

練炭使ってましたから、残り物のおでん鍋をそのまま燃え残りに掛けておくと、明くる朝いい具合におつゆがしみてるんですよ。ですけどあたしは野菜が嫌い、肉が嫌い、御飯が嫌い、ね。お刺身と生卵しか食べない。すると店のお客さんが、昔はあたしも可愛かったのかどうか、坊やに坊やに、って、お菓子を買ってきてくれ



今年九月、歌舞伎座で二代目吉之丞を襲名披露したばかり。

るんです。母も忙しいから子供にかまけちゃいられませんでしたよ。お前にもらったんだよ、なんてお菓子よこせば、こっちもおなかすけばそれ食べて、部屋ん中でばかり遊んでましたでしょ。そんなこんなで糖尿病になったんです。尾籠な話で恐縮ですがおまるでおしっこをして、それがポトリと廊下に落ちるとみるみる白粉のように真っ白になっちゃうんです。それはあたしよく覚えてます。子供ごろにあんまりびっくりしたものですから。でも急性でしたから、食養生でじきによくなりましたけど、そのせいで今もこんなにやせっぽちなのかな、と思いましてねえ」

糖尿病は治ったが、この子は気管支が弱いから東京にいてはとも長生きできないよ、と医者に言われ、万之丞の母親はみすみす繁昌して

いる店をたたんで二人切りで（看板娘の姉さんはこのとき父方へ行く）日立の助川に家を借り、転地療養をさせてくれた。そこは畑の中に家が二軒だけ建っているという、とても寂しい場所だった。

「お隣りは秋田県から移って来た家族で、母とはまるきり言葉が通じない。その上暗くなつて蛇なんかが出てくると母が震え上がって、子供のあたしに取りすがって泣くんですよ、もうあたしやだよ、田舎は、というんですよ（笑）。それでも二年近くもそこにおりましたか。おかげで丈夫になつて、小学校へ上がる前には東京に戻りました。今度は神楽坂の坂下で同じようなおでん屋を始めたんですが、あたしがそろそろ学校へ上がるようになると、酒を売る商売では教育に悪い、というのでその店をたたんで、今度

は本多横丁のお豆腐屋の奥のひと間を借りて、母が針仕事で細々と生計を立て始めたんです。

だんだんと貧しい暮らしになりましたねえ」

ここで気を変えて、万之丞が初めて見た芝居のことを訊いてみた。それはまだ神田のおでん屋時代、かなり裕福だったころの話で、万之丞は五つだった。母親と明治座の花道際のいい席で初代吉右衛門の「佐倉義民伝」を見たのが最初、というから、やはり播磨屋とは浅からぬ縁だ。「先代の旦那が木内宗吾と仏光寺の僧光然こうぜんの二役で、この坊さんの花道の引っこみがそれは恐ろしくて、母にしがみついたのを覚えています。直訴をして宗吾の一家が処刑から免がれるようにと、叔父に当たる光然和尚は護摩を焚いて祈禱はりたしているんですが、一家全員磔はりつけになったという御注進があつて、神も仏もあるものか、という

わけで、経文を破り護摩の火に投げ込んで、物凄い形相になって処刑場の印播沼へ行つて入水する。まあそのときは子供ですからそんな詳しいことはわかりやしません。でも場内割れんばかりに鳴り響く義太夫に合わせた、先代旦那の引っこみの迫力はいかにも凄くて、思い出しても恐いくらいです」

万之丞の子供のころの一番楽しかった思い出は、まだ若かった母親にしがみついて見たという、この芝居見物だったかもしれない。

後年その初代吉右衛門に弟子入りしてから、五つのときに見た恐い「義民伝」の話を師匠に話したことがあるかどうか訊いてみた。

「先の旦那にはとうとう言う折がありませんでした。今の旦那（現吉右衛門）には、はずみで話したかもしれません」（エッセイスト）

現代の快僧その八

法華宗 法昌寺住職

福島泰樹さん

ほんとうの 葬式

取材・文 稲葉小太郎



ふくしま・やすき●一九四三（昭和十八）年東京生まれ。早稲田大学西洋哲学科卒業。一九六九年、歌集『バリケード・一九六六年一月』でデビュー。主な歌集に『望郷』『無頼の墓』。CDに『中原中也』『さらば常磐座の灯より』、エッセイに『孤立無援の思想を生きよ』ほか多数。季刊文芸雑誌『月光』編集発行人。

吉祥寺「曼荼羅」。古びた漆喰の壁に囲まれた洞窟のようなライブハウスの、煙草にけぶるステージの上、スポットライトを浴びて彼は立つ

ていた。黒いシャツ、黒いズボン、白いサスペンダー、白い帽子。足にはボクシングのリングシューズ。左手には台本。だらりとさげた右腕

の上腕は、何年もかかって鍛えたのであろう密度の高い筋肉の盛り上がりを見せている。

「今日のステージは、一昨年の八月十二日に亡くなった中上健次に捧げます」

始まった。張りつめた静けさの中から、自作の短歌が次々と浮かびあがってくる。初めは切々と、次第に激しく、最後は叫びだ。ドラムスとピアノが、なだめるように、鼓舞するように、彼の声にからみつく。

へ吹雪のハドソン川よわが愛しき青春よサックスよ、死ぬなよな中上健次よ

へさようなら寺山修司かもめ飛ぶ夏 流木の漂う海よ

ヘレインコート顔を被って死んでゆくズボンの裾の泥も拭わず

中上健次、寺山修司、二十一歳で自殺した詩人岸上大作。さらには高橋和己、たこ八郎、千

刈あがた。聞こえてくる名前は、みな、すでにこの世にはいない。

「俺はステージで葬式やっているんだよね」

かつて彼は語ったことがある。この言葉は、なにを意味しているのだろう。

福島泰樹さんは法華宗本門派の僧侶で、台東区下谷の七福神のうち毘沙門天をまつる法昌寺の住職。

歌人としても名高く、一九六九年、六〇年安保闘争とそれに続く全共闘運動の青春を描いた『バリケード・一九六六年二月』という歌集で鮮烈なデビューを飾った。その後「歌謡の復権と肉声の回復」をスローガンに、「短歌絶叫コンサート」と題した空前絶後の表現形式を生み出す。ステージに立つこと五百回以上。ここ曼荼羅において毎月十日の定例コンサートを始めて、来年で十年になる。

同世代の男たちの中には、すでに社会の中でそれなりの地位を築き、それを守ることに汲々としている者も多い。福島さんはいまだにあの時代にこだわっている。戦いはまだ続いているのだ。

……ファースト・ステージが終わった。明かりがついた店内を見回すと、意外にも若い顔が多いことに気がつく。最前列には二十代の男性数人が陣取り、女性の四、五人のグループもある。彼らは何を求めてここに来るのだろうか。

もしも福島さんの戦いが単なるノスタルジーであるならば、若い世代の共感は得られないだろう。そこにはなにか、古くて新しい、ぼくらが決して失ってはならないものがある。それはなんだろうか。

強い者への反発

一九四三年三月、第二次世界大戦もしいに

憂色を濃くするころ、東京下谷の感応寺住職福島信一郎さんの次男として福島泰樹さんは生を受ける。

だが誕生のその瞬間、産声は聞こえなかった。逆子で、たいへんな難産だったため、仮死状態で生まれてきたのだ。産婆は赤ん坊の足を持ち、強く尻をたたいた。おかげで呼吸することができたのだが、その際の衝撃で左足股関節を脱臼。三歳になるまで歩くこともできなかったという。

戦時中で満足の医療を受けられなかったのだろう。生んでくれた母は一年後に他界している。二歳になったころ東京は大空襲を受け、あたりは一面、焼け野原。外に出れば、上野から浅草まで一望のもとに見渡せる。

終戦。貧しかったけど、子どもたちはみんな生き生きとしていた。娯楽と言えばラジオだけの時代。落語や浪曲の番組を聴いては、翌日は



「短歌絶叫コンサート」の舞台で、自らの短歌を体全体で表現する福島住職。

みんなて真似をする。特に好きだったのが広沢虎造の浪曲「清水の次郎長」。そのころの子どもたちは、誰もが芸能者としての才能を持っていたのだ。

生まれたときの股関節脱臼の影響で、福島少年はこころもち足を引きずるように歩いた。子どもにとつてつらいことだ。駆けっこをしてもいつも遅れるし、なかなか自分を発揮する場面がない。だから子ども時代の自分は泣き虫で、成績もできたほうではなかった、と福島さんは語る。

しかし小学校四年くらいから、すこしずつ自分の力が出てきた。六歳年上の兄から喧嘩のやり方を教わるうち、自分が強くなっていくのがわかった。

中学では剣道部に入部、ボクシングにも興味を持ち、雑誌を読んだり、原っぱでの自主トレ

ーニングに励んだ。と同時に図書部に所属し、筑摩書房の『日本文学全集』など図書館にある本はほとんど読破した。文学青年というわけではないけれど、自分の内面に目を向けるところがあったようだ。

また自分が弱く、つらい思いをした経験からか、強いものに反抗し、流行りものには反発する気持ちが強かった。西部劇でも、応援するのはインディアンの方であり、米軍兵が子どもたちにキャンディを投げるのを見ても、一度も欲しがったことはない。

権威権力に我知らず反発してしまう性癖は、少年時代に培われたのだ。

ひとことで世界を表現する

短歌との出会いは偶然だった。一年間浪人して入学した早稲田大学で、たまたま扉を叩いた

「早稲田短歌会」の部室の雰囲気が入ったのだ。それまで短歌にたいする関心があったわけではなく、年寄りの手慰みくらいにしか思っていなかった。

しかしそのとき出会った短歌はまったく違った。ときは六〇年安保が終わって二年。短歌会の部室にはまだ余熱が残っていた。塚本邦雄、岸上大作。佐々木幸綱といった前衛歌人たちが次々と作品を生み出す。呼応した寺山修司が、現役で短歌を書いていた。

正直言って、前衛歌人たちのつくる短歌が最初からわかったわけではない。しかしとにかくストレートに胸に響いた。新鮮だった。

でも、なぜ短歌でなければいけなかったのか。

「短歌がほかの表現よりもすぐれているところは、突出した詩型なんです。あるいは直立した詩型といってもいい。五七五七七という三十一

文字の中に、日常をグッとたわめて真っ直ぐに立てるんです」

直立猿人ならぬ直立歌人。それは単純に、内容が過激だという意味ではない。すべての時間が一瞬に凝縮され、ひと言によって世界すべてが表現されてしまう、そういう表現なのだ。時代のまったなかで、その時代のエッセンスを抽出してつきつけることができる。あの時代に、最適の表現だっただろう。

鮮烈なデビュー

大学時代は、デモと議論に明け暮れていた。バリケードの中で歌を作る日々。ところが自分は坊さんになるんだという思いがどこかにあった。福島さんには六歳違いの兄がいるのだが、事情があつて兄は出家しなかった。当時父は法華宗の宗務総長。

「その息子がふたりとも僧にならなかったら、オヤジの立場がないよなあ」

だから福島さんが僧になったのは、最初は、仏教に目覚めてというよりも、父を喜ばせたいからだった。

六七年尼崎の本興寺で修行生活に入る。肩まで伸びた髪は、寺の近くで切った。

修行道場での生活はつらかった。

仏教の教義について、とにかく覚えなければならぬことが多すぎる。法華宗は日蓮聖人を宗祖とし、法華経のうち本門の八品を勝位とする勝劣派として、明治時代に身延山を中心とする日蓮宗（一致派）と別れて今日に至る。教義を大切にする学問宗であり、当然、修行のなかでも学問的なアプローチが重視される。もちろん仏教の分類はそれなりの意味があることが、今では実感できる。だが、自分自身の問題とし

て仏教を捉えることができなかった当時、受験勉強みたいな丸暗記の世界にはどうしても馴染めなかった。しかもときは激動の時代。刻々と



法昌寺から歩いて5分の日東ジムでもくもくと汗を流す。

いるんだ」

あせりと申し訳なさでたまらない気持ちだった。陸橋の上に立って、デモ隊を見送った。そ

入ってくる学園紛争のニュースに心が動かないはずがない。

その年の十月八日、羽田闘争が勃発。ラジオを聞いてすぐに寮の堀を乗り越えて梅田に走り、新聞を買いあさった。

「おれはなんでこんなところに

れがせてもの連帯のあかしだった。

しかしその現場にいらなかったということ
が、逆に表現を生んだともいえる。福島さんの
処女歌集『バリケード・一九六六年二月』は修
行先でまとめたものである。

一九六九年、歌集が刊行されるや、大変な話
題になった。

へ一隊をみおろす 夜の構内に三〇〇〇の髪戦
ぎてやまぬ

へ流血に汚れしシャツを脱がんとも掌はひとく
れの塩のごとしよ

へここよりは先へゆけないぼくのため 左折し
てゆけ省線電車

当時「早稲田文学」の学生編集者として福島
さんと知り合った、作家の立松和平さんは語る。
「鮮烈でした。殴られたような衝撃がありまし
たね。あの時代に言葉を与えたんですね。ぼく

も小説を書こうとしていたときでしたから、ま
ぶしい存在でした」

学生たちはガリ版刷りの海賊版を回し読みし
た。学生新聞や組織の機関紙に引用されること
も多かった。校舎を横切る垂れ幕に、でかでか
と短歌が書かれていたこともある。

へ愛と死のアンヴィバレンツ落下する 花恥じ
らいのヘルメット脱ぐ

若者は、自分の気持ちを代弁してくれる表現
として、短歌を選んだのだ。

『バリケード』はその年の現代歌人協会賞の候
補にもなった。

東京脱出、そして帰還

東京に戻り華々しい脚光をあびた福島さんだ
が、時代は変わりつつあった。七〇年安保闘争
は「壮大な零からの出発」と言われた。冷えて

いく時代のなかで、何かが違ってしまった。

もう東京にはいたくない。

決意して静岡県愛鷹山の古い寺に入る。檀家が二十八軒しかない庵のような小さな寺だった。独り身を同情して、老婆たちがなにくれとなく世話をやいてくれる。夕暮れになると野良仕事を終えた老人たちが、上框に腰をかけて昔話を聞かせてくれた。

「おれは彼らとともにここに居よう。全員に引導を渡してやろう」

自分は一生をこの寺で終える決意で、感應寺は妹夫婦に譲ってしまった。

しかしその一方では、東京に対する思いも絶ちがたくあった。たまに東名バスに揺られて新宿に飲みに行くと、そこには全共闘の熱気があった。作家の中上健次と出会ったのは、そのころのゴールデン街だ。

山寺の囲炉裏端で酒を飲みながら、東京への想いはつもの。想いが歌になる。

愛鷹山には七年間住み、「晩秋挽歌」「転調哀傷歌」「風に献ず」と三冊の歌集を刊行した。そんなとき下谷の法昌寺の住職に、という話が持ち上がった。戦後身を寄せていた寺でもあり、先々代の住職と父との縁もあって、福島さんに白羽の矢が当たったのだ。

へ村人を欺き親を裏切つて月光の中溺れるごとく

村を離れる前、最後に作った歌だ。別れの夜は村人の前で、涙で顔を上げることもできなかった。

存在の産声

福島さんは東京へ出てくる前、一九七五年に龍という名前のシンガーソングライターと出会

い、一緒にステージに立つようになった。短歌にバックミュージックがついた。「短歌絶叫」への道が開かれた。

絶叫とはなにか。これを言葉で説明するのはとても難しい。福島さんによれば、

「短歌が生まれたときの状況が、読むことよって再現される。そのときの想いが自分の感情となって蘇るんですね」。

目で読むだけでも、意味はわかる。でも、声に出すことによって、生き生きとしたイメージを共有できる。絶叫することにより、創造のまさにその瞬間が再現されるのだ。言葉が「意味するもの」を通り越して、「存在そのもの」へと変化する。

そのときかつて関わりを持った死者たちが、福島さんの肉体を寄代として蘇る。中上健次が、寺山修司が、そこに現れるのだ。

絶叫は、生まれること、生きてあること、出会うこと、別れることをアジテートする。それは集まった人間のお祭りだ。

もちろん福島さんにとっては叫ぶことはカタルシスであり、根源的な癒しであるに違いない。あるいは、この世に生まれ出た瞬間に発することができなかった産声を、今、発しているのかもしれない。

死者を迎えての祭り、アジテーション、カタルシス、癒し。考えてみればこれこそが葬式の本来の姿のはずだ。集まった人間が死者のことを本気で想い、死者の気持ちにシンクロナイズすること。そうでなければ死者が救われることはないだろう。

ただ形式的にお経を読むだけで、なんの効果があるだろうか。そう聞くと、福島さんは首を横にふった。

「短歌だってこれだけの力を持っているんだから、お経の力は計りしれないね。お坊さんが一番いけないのは、お経の力を信じられないことです。お坊さんが本気になってお経を読んだら、世の中変わるよ」

勝者のいないゲーム

ここまできて、福島さんの絶叫が南無妙法蓮華經の唱題行に他ならないことに気づく。

実は福島さんは、短歌のコンサートのことを、ずっと檀家さんに言うことができなかった。なにやら気恥ずかしい感じがあったのだ。

「でも、今は堂々と招待状を出したい気分。短歌と仏教が、やっと自分のなかでひとつになつてきたようです」

立松和平さんも、言う。

「最近の福島上人を見ていると、なにかふつき

れたような感じがあります」

かつてはあれほど嫌だった仏教の勉強を、今、もう一度したいという。

福島さんの生きてきた跡をたどってみると、そこにはつねに中心から飛びだそうとする離心力が働いているのに気づく。大学生活を抜け出して修行へ行ったかと思うと、詩人として戻ってきて脚光を浴びた。すぐにまた山寺へ籠ってしまうが、再び東京へ戻り絶叫というジャンルを生み出す。

そこにはつねに自分とはなにか、なぜここにいるのかという、厳しい問いが存在している。そのアイデンティティのゆらぎが、激しい表現を生んでいるのだと思う。

今、福島さんは仏教へと帰ってきた。

自分のやってきたことが、仏教に他ならないことに気づいたのだ。

ところで、福島さんは大の上に大が三つくらいつくボクシング・ファンだ。中学生のころから専門誌をむさぼるように読み、なんと三十七歳のときに上野の日東ジムに入門。厳しいトレーニングに耐えて、現在ではセコンドの資格を持ち、タイトルマッチのリングへ登ったことも



境内の一角には「たこ八郎」さんのお地藏様がある。

ある。

「ボクシングは定型詩だ」

福島さんはい。同じ体重、同じグローブ、極限まで厳しい条件のなかで、いかに自分を生かしていくか。それは三十一文字の中にいかに表現していくかに似ている。

ぼくは、ボクシングは勝者のいないスポーツかもしれないと思う。試合後のリングを見ると、勝った者も敗者と同様に疲れ傷ついている。ボクサーに明日はない。今日は勝っても、いつ負けるかわからない。だとすれば、ボクシングとは、いつか死ななければならぬこの人生そのものではないか。

いつかは負けるとわかっていて、なぜ闘うのか。死ぬとわかっていてのになぜ生きるのか。

この疑問に対する答えはない。
ただ叫ぶことができるだけだ。

念仏信仰の系譜

中国編

須藤隆仙

3

曇鸞大師

菩提流支三蔵から曇鸞大師が浄土の聖典を授
与されたということは、念仏信仰史の中で実に
重大な出来事なのであります。と申しますの

は、この曇鸞大師というお方は大変優れた宗教
的人格をおもちのお方でして、学問的にも思想
的にもすばらしいお方であられ、この方によつ
て浄土教が一大飛躍を遂げたからなのでありま
す。哲学者梅原猛氏は、中国の浄土思想は慧遠

によって創唱され、曇鸞によって体系化された
といっておられますが（『仏教伝来』、よい指摘
だと思えます。そこで曇鸞大師について述べま
す（以下「大師」と記す）。

大師の伝記資料は数多くあつてとまどうの
ですが、中国の『続高僧伝』（唐の道宣編）によ
つて述べますと、魏興和四年（五四二）六十七
歳で寂とありますから、逆算すると北魏孝文帝
の承明元年（四七六）の生まれとなります。出
生地は山西省代県（たいけん）の北西の雁門（やんもん）だといひます。
別説もありますが、『広辞苑』にまで、曇鸞に
は「雁門」の異称があると出ているほどですか
ら、雁門説がよいでしょう。雁門は高い山で、
北へ帰る雁が飛び越えられぬため、山腹に穴を
掘つてやつたとの伝説から出た名だそうです。
少し離れたところに五台山という霊山がありま
す。大師は十余歳の時のこの山に登り、身心歓喜

して出家したといふのですから、少年時から常
人ではなかったようです。それからといふもの
は、広く内外の諸典を学び、とくに四論を学ん
だといふのです。四論とは、龍樹著『中論』『十
二門論』『大智度論』に提婆（だいた）（龍樹の弟子）著
『百論』の四著をいふのですが、それらは空と
いふことを説く書なのであります。空とは梵語
シューニヤターの漢訳で、一切のものはすべて
因縁によつて起こるもので、本体・我体・実体
というものは無いのだ、との真理をいふのです。
また仏性（ぶつじやう）といって、人間がもつ仏となるべき性
質（可能性）の勉強などもしたのでした。つい
で『大方等大集經』というお経の註解を試みま
したが、病氣になつてしまいました。そこで他
地へ行つて療養してよくなつたのですが、仏教
を究めるにも体が丈夫でなければだめだと痛感
し、長寿の術を習うため、江南にいる陶隱居と

いう有名な仙人をはるばる訪ねたのでした。

この仙人は本名を陶弘景とうけいといい、梁の武帝が尊敬している仙人さんでしたから、大師はまず武帝に謁し、武帝の助言でこの仙人に会い、不老長寿のことを書いた『仙經』十卷を頂いたというのであります。『統高僧伝』には、武帝が大師の人格に感服した話が記されております。陶弘景はもちろん実在の方で、本草に関する著書もあり、「梁」という国号を選んだのもこの仙人だそうでありまして、そんな方が『仙經』を贈ったのですから、大師もまたただならぬお方であられたことが想像されるのであります。

浄土聖典を得る

さて、『仙經』を手にした大師は大喜びし、山に入りその術を身につけようと帰途について、洛陽を過ぎたところで、前回記しました菩提流

支三藏に会ったのであります。そこで大師は、『仙經』を入手したことを自慢げに話し、仏教に仙術以上の長生不死の法があるでしょうかと質したところ、菩提流支三藏は、「あさましいことを言うものではない」といって大地にパツとつばを吐いてみせ、「これこそ本当の意味での長生不死の法である」といって、ある仏典を懐から出してみせたのでした。『統高僧伝』に、別れば『観無量寿經』であつたとありますが、別説では『無量寿經』とも『阿弥陀經』ともいい、また世親菩薩著『浄土論』だろうとの説もあるのであります。いずれにしても、浄土教の聖典でありました。

菩提流支三藏は、念仏によって無量寿・無量光の世界に救いとられていくことを、じゅんじゅんと説きましたので、大師はこれまでの軽率さを恥じ、『仙經』十卷を焼き捨てて念仏の信

者になったというのであります。私は南方熊楠の『書簡集』を読んでいて、南方さんが土宜法龍師（真言宗の高僧）への手紙の中で、「曇鸞なりしか、聖教を読んで不死の法書を焚き失てしという」と記しておられたのを見、南方翁の博識に驚いたのですが、念仏信仰史の上では、前記のようにこれが重大事件なのであります。

大師はその後、帰郷して専ら念仏を称え、一般にも弘め、魏の帝王の尊信を得て并州の大巖寺に住し、のち汾州北山石壁の玄中寺に移り、やがて平遙の山寺で寂したというのであります（寂年については異説あり）。

曇鸞大師の著述

大師は医術や道教に関する書も著わされたといいますが、お念仏関係のものでは、左の三部が有名であります。

- ① 『浄土論註』二巻
- ② 『讃阿弥陀仏偈』一巻
- ③ 『略論安楽浄土義』一巻

①は有名な世親菩薩の『無量寿経優婆提舍願生偈』（略して浄土論とも往生論とも）の註釈書で、すばらしい内容のものであります。②は主に『無量寿経』によって阿弥陀仏と浄土とを讃え上げたもの、③は浄土往生の因果を問答体で述べたものです。これは疑問視する人もおります。

①の『浄土論註』は大師晩年の御作ですが、『浄土論』の著者世親菩薩は、一説に西紀四八〇年頃に寂といわれているのであります。大師の生年は四七六年というのですから、両者そんなに隔たっているお方々ではないのであります。

『浄土論』を漢訳したのは前記のように菩提流支三蔵ですが、その訳した年代は五二九年ある

いは五三一年というのですから、わずか百年くらいの中に、著述され、漢訳され、註釈書が出される、といった具合でありまして、私はこの一連の動きに、何かしら因縁めいたものすら感じるのです。とにかく有り難いことです。

すばらしい『浄土論註』

さて、その、すばらしい『浄土論註』の内容について愚考を述べてみますと、左のとおりであります。

第一に、浄土三部経の原形を固められました。『浄土論註』（以下「論註」と略称）に、「釈迦牟尼仏、王舎城および舍衛国に在して大衆の中において無量寿仏の莊嚴功德を説き給う」とありますが、王舎城は無量寿経と観無量寿経とが説かれたところ、舍衛国は阿弥陀経が説かれた

ところ。したがって、この一文は浄土三部経を指しているものであります。

第二に、浄土三部経の本筋は「南無阿弥陀仏」「本であると喝破されたこと」です。右の文に続いて、「はつきりと」「即ち仏の名号を以て経体となし給えり」と述べておられます。

第三に、世親菩薩の浄土論を註釈するのに、冒頭にまず「謹じて案ずるに、龍樹菩薩の十住毘婆沙に言う」として龍樹菩薩の説をあげ、インドの念仏信仰系譜における龍樹―世親のラインをはつきりさせたこととあります。浄土論の註釈を書かれたのですから、世親菩薩を敬ったのは当然ですが、龍樹菩薩をも非常に尊敬されたのであって、『讃阿弥陀仏偈』では「大師龍樹摩訶薩」とか「南無慈悲龍樹尊」などと称揚しているのです（摩訶薩は菩薩と同語）。

第四に、この龍樹―世親によって明瞭化され

た念仏信仰を、〃大乘仏教の極致〃と明言されたこととあります。それははっきりと、「上^{じやうらん}衍の極致」と書いておられます。上^{じやうらん}衍とは大乘（梵語マハーヤーナ）を指す語なのです（マハーヤーナを摩訶衍と音写したのからきている）。

第五に、阿弥陀仏の救済対象は最下位（下^げ品）の凡夫であり、五逆謗法（五^ごつの重罪を犯し、正法を謗^{そし}る）の悪人であるということを明らかにし、その凡夫・悪人が救われる理論的根拠を明示して下されたことです。これはかつて空思想を学ばれ、仏性（仏に成る可能性）を研究された大師にして、始めて立論できることでありまして、大師教学の一大特色といつてよいであります。即ち以下のように教示されるのです。無知の凡夫・悪人でも、念仏して浄土に生まれたいと願えば、それは実現される。何故ならば、念仏や浄土は仏の眞実世界の話であるの

だから、凡夫や悪人の心は煩惱^{ぼんのう}の炎であるにしても、氷（眞実界）の上で火（煩惱）をもしているようなものであつて、やがて氷が解けて火を消してくれるのである。また、浄摩尼珠^{じやうまにしゆ}といつて水を浄化する作用をもつ珠があるが、念仏はこの珠のようなもので、凡夫や罪人の罪を消すのである。以上のような解りやすい巧みな例話で、この面倒な論理を説明してくれているのです。

第六は、本願他力に対する認識を強調されたことです。龍樹菩薩は仏法に難行道と易行道とがあると考えたが、大師は難行道を自力の行法とし、易行道を他力の行法と教えてくださいました。自力は自分の力で修行して悟りを開くのですが、他力は阿弥陀仏の本願（衆生を救おうとする誓願）にすがつて浄土に生まれ、そこで悟りを開くのです。今日「他力本願」といえば、

何もしないで他人まかせにしていることのように解釈されてますが、とんでもない話であって、他力とは仏の本願力のことでですから、絶対の信がないと出てこない世界なのであります。大師はその本願力を強調されたのであり、親鸞聖人はそのところを、「四論の講説さしおきて、本願他力をときたまい、愚縛^{ぐばく}の凡衆をみちびきて、涅槃^{ねはん}のかどにぞいらしめし」と歌われたのでした（『高僧和讃』）。なおついでですが、これからは「他力本願」といわないで、なるべく「本願他力」というようにすればよいと思考するのです。「他力本願」というと他人まかせのように聞こえますが、「本願他力」というと、その宗教的な意味が強く感ぜられるようです。さらにまたついでですが、鈴木大拙博士は、人々を救おうとする阿弥陀仏の本願を、「救済しようとする宇宙的な意志」といったふうに表現され

たそうであります。が、本願他力とは正にそれであって、大師のそれは、そういった世界へ人々を導いたという点で、精神文化史上の功績を感ぜずにはいられないのであります。

第七は、龍樹菩薩が、念仏して不退の地位につけるといふご教示を説かれた。その不退の地位は「この世」での話でありましたのに対し、大師はこれを宗教的に今一歩進められて、「あの世への往生」をも明示されたのであります。そのためには阿弥陀仏の本願が四十八ありとする（無量寿経に説く四十八願）その中で、念仏を称えれば浄土へ往生できるとする第十八番目の願（念仏往生の願）こそ重要であると着眼されたのでありまして、これもまた重大なことであります（他に不退を約束された第十一番目の願や、確かな成仏を約束された第二十二番目の願も大切だといっておられます）。

第八は、称名念仏（阿弥陀仏の名を口に称える）を重視されたことです。大師は前述のごとく龍樹菩薩にも傾倒されましたから、当然ながら菩薩が説かれた称名ということを重視されたのでした。念仏にはもともと心に仏を憶うという憶念の意味もあるのですが、第十八願に「もし十念せんに」とあるその十念を、「阿弥陀仏を憶念する」と釈され、その下に「ただし名号を称うるも亦また是の如し」と註記されたのでした。このことは、やがて後に、善導大師によつて、念は即ち称なりという念称（ねんしょう）の思想に昇華されていくのです。

第九は、右にいった「十念」について、必ずしも数にとらわれるものではないと教え、十念は業事成弁（ごうじじょうべん）（浄土往生の業が完成されること）であると示されたことです。他想を雑えないで懸命に仏名を称えることが十念なのだと教えた

のでありました。ただし十の数をどうしても知りたい場合は、口伝があるとして、それは師から弟子に伝えていきなさいとも教えられました。浄土宗では五重相伝でこれを教授しております。第十は、廻向（えこう）について往相廻向と還相廻向との二義を教えられたことです。廻向は梵語（パーリ）ナーマナーの漢訳で、自分の行なった善根功德を他へ廻し向けることですが、大師は、念仏して共に浄土へ往生しようと願うのを往相廻向とし、往生した人が今度は娑婆（しゃば）の人たちを救う力となって還えってくることを、還相廻向と教えられたのでした。

以上、曇鸞大師は、豊かな学殖と、卓抜した思想と、厚い信仰とによつて、お念仏の教えを大発展させたのであります。

（函館・稱名寺住職）

民話が語る老いと救い

松谷みよ子



イラストレーション—小菅遼

民

話の中には何故、じさとばさがこんなにも登場するのだろう。花咲じいもそうだしうりこ姫もそうだし、桃太郎もと数えていくときりもないほど、じさとばさは主役になっていて、それも子持たずの——という設定が多い。

もう十年前になるか、福島のある村へ民話採訪のために訪れたとき、屋根葺ふきの話になった。嫁をもらう、婿をとる、なにごとにつけその家の屋根をみろという。きちつと葺かれていれば、安心だという。また、屋根葺きには結いというのがあって、一軒の家で屋根を葺くときには結い仲間がみんなでカヤを持ちより人手を出して助け合って葺くという。

「では子持たずのじいとはあがいたら、どうな

るのですか」

と問うてみた。すると「結いには入れない」という返事が帰ってきた。

そういうことだったのか。

昔

屋根を葺く一本のカヤもねえ、貧しいじいとはあがいて……たしかこういう語り出しがあったと思う。今は老人の独り暮らしも珍らしくはない世の中だけれど、でも私の知人に村で独り暮らしをしている老女おんながいて、悲しい声で電話をかけてくる。だれひとり身内のない村の暮らしの切なさ、電話線を伝ってか細くか細く伝わってきて、どうなぐさめていいのか、言葉に窮するのである。まして、少し昔、子持たずのじいばあわびしさ。

そうか、だからこそ神の恩寵おんちゆうがくだって、犬

コが流れついたり、桃や瓜から子供が生まれ、仕合わせをもたらししてくれたのか。

今私も、おとしより、と分類される年齢となった。年をとっていくということは、一つ、一つ、段階があつて、そのたびに段をあがるように、いやくだるようになか、踏みしめ、クリアしていかなくてはならない。「年をとるということは、悲しいもののなのよ」と八歳上の姉がいう。そうだろうと思う。しかし、民話の中の老人たちはなんと元気なことだろう。

老人の笑い、知恵、たくさんのお人のむかしから、私の好きな話を記してみようと思う。

ここに豪快な老女がいる。岩手県の話である。

ある所に婆様と倅とが居つた。倅も齢頃

なつたので、近所の人の世話で隣村から嫁をもらつた。嫁は来た当座は姑婆様にもよく仕えたが、だんだんと邪魔にし出した。そして折があれば何のかんのと倅に言いつけた。

夫な婆様はナジヨにもはア汚くてと言つた。婆様が寝て居て虱をとつて噛み潰している音を聴き、あれあれ夫な、婆様はあるもない米を盗んで、ああして夜昼噛み食つて居ます。あんな婆様を家さ置いてはよくないから、奥山へ連れて行つて棄てて来てがよいと言つた。

倅も初めはそんなことを言うものではないと言つていたが、あまり嫁がいうし、嫁のいうことを無視すると面白くないことばかりなので婆

様を負うて奥山へ行き、あろうことか嫁に言いつけられた通り萱の小屋をつくって婆様を中へ入れ、火をつけて逃げ帰るのである。

婆様は倅が逃げ帰った後で、死にたくないから小屋の中から這い出した。這い出したがどこにも行かれないから、その小屋の焼け残りの火にあたって居た。その中に夜になると、山奥でその火明かりを見た鬼の子供等が五、六匹不思議に思つて出て見た。すると一人の婆様が火を焚いてあたって居たから、鬼の子供等もやっばり近寄つて火に手を翳してあつた。

そうして婆様の内脰を不思議そうに覗いて見て、婆様婆様其所は何だと言つた。婆様は

ああこれが、これは鬼の子供等を食う口だぞと言うと、鬼の子等は魂消たまげて騒ぎ立てた。それを見ると婆様はわざと、大脰をひろげて、さア餓鬼ども取つて食うぞとおどかすと、子鬼どもは謝つて、婆様婆様許せ、その代わりこの打出の小槌という宝物をあげるからと言つた。

さて、小鬼どもから打出の小槌をもらった婆様は、さあさあここさ千軒の町が出ろと言つて、トンと地面を叩くと、ざろりと千軒の町屋が出た。そのまんなかへ行つて、ここさ大きな館出ろと言つてトンと叩くと大きな館が出た。それから人だの馬だの、店屋も酒屋木綿屋と打ち出して、俺は女殿様になるといつて、その女殿



様になる。

倅

夫婦は相変らず貧乏暮らしたたが、ある日やせ馬に薪をつけてこの町へ売りにき

た。そして館へいって女殿様を見ると自分たちが捨てた我が家の婆様だったから、驚いたのなんの、それからというものは、婆様のように女殿様になりたいと夫にせがみ立てた。仕方なく夫は嫁様を背負い、別の奥山へ連れていって萱の小屋をかけて、そこへ嫁を入れて火をつけた。嫁は焼け死んだ。

佐々木喜善が集めた『聴耳草紙』という岩手の昔話集に所載された話である。虱をとって噛み潰す音を生米をかじっているといいつけるあたりの描写は、かつての日本の農村の姿をまざまざと浮彫りにしているのだが、その貧乏たらし



く汚い婆様が、鬼の子に内股をのぞかれ、そこは何だと問われるや、鬼を取って食う口だ、と喝破する。ここが何ともいい。しかも、打出の小槌で打ち出すものが、白いまんまにとうふの汁、などというものでなく、千軒の町といい、女殿様になるという望みの高さ、まことに豪快なのだ。この話こそ老人たちに勇気を与える民話ではないかと、私はかねがね思っているのだが。

話は少し外れるが、私は宮城県女川の岩崎としゑさんの許へずいぶん通った。働き者で言い尽くせぬ苦勞もした人だったが、ほんとに明かるくて、一冊、語りの資料集をつくらせてもらった。そこにはおさめなかったが、今もおかしく、思い出す話がある。

ある年、ちょうど町が選挙でわきたっている最中に、とある婆さま、歯医者へいった。治療がすんで出てくると、選挙の運動員につかまつた。「婆っちゃん、おめは何派だ」するととある婆様、悠然と答えた。「おらあ奥歯だ」

なんとも楽しい。こういう婆様になりたいものである。

さて、民話の中には、無心な者、無欲な者への仕合わせが約されている。「こぶとりじい」の話なら知っている、という人は多いだろう。こぶのある爺様は鬼や天狗に踊れと言われると、怖さも忘れて踊り出し、やんやと喝采され、明日またこいよと約束のしるしにこぶをとられる。

その話を聞いたもう一人のこぶのある爺様はまねをして出かけるが、恐しさに踊るどころか

へたりこみ、面白くない爺だ、昨日のこぶは返すわ、と、もう一つ、こぶをつけられて泣く泣く帰るのである。

これは鬼を取って食う口だ、と鬼の子をおどしあげる婆様も、相手が天狗だろうと鬼であろうと、踊らにやソンソンと踊り出す爺様、どこか共通してはいないか。そして、こぶ取りの爺には、踊ることへの無心な喜びが、こぶを取って貰うという恩寵につながる。

もう一つ、老人の無心さ、無垢な心がよく現われている話を置いてみよう。

昔、ある田舎に爺さんと婆さんとおらしたちゅうもん。そのうちに爺さんがふと死なしたけん、婆さんは悲しさに仏に参ってばかり

おらしたつてな。あるとき、坊さんが一人道に迷うたけん、泊めてくれろといわしたちゆうもん。婆さんは喜んでな、お経をあげてもらおうと思うち、上にあげて、たいそうごちそうさしたちゆう。それからお経ばあげてくれろて頼ましたばってん、そん坊さんは坊さんでも名ばかりの人でお経は知らつさんもんで困らしたが、

さて、困りはてた坊さんがひよいとみるとそこに鼠が一匹出てきた。そこで「おんちよろちよろ出てこれそろ」という。次に鼠が穴をのぞいたので「おんちよろちよろ穴のぞき」それから鼠が鳴いたので「おんちよろちよろ何やらささやき申されそろ」「おんちよろちよろ出て

いかれそろ」と鼠の様子を逐一お経に読んでごまかした。

何

も知らぬ婆さんは有難がつて、それから毎日毎晩、おんちよろちよろのお経をとなえていた。そのうちにある晩、泥棒がやってきた。ところがそろりそろりと入っていくと、

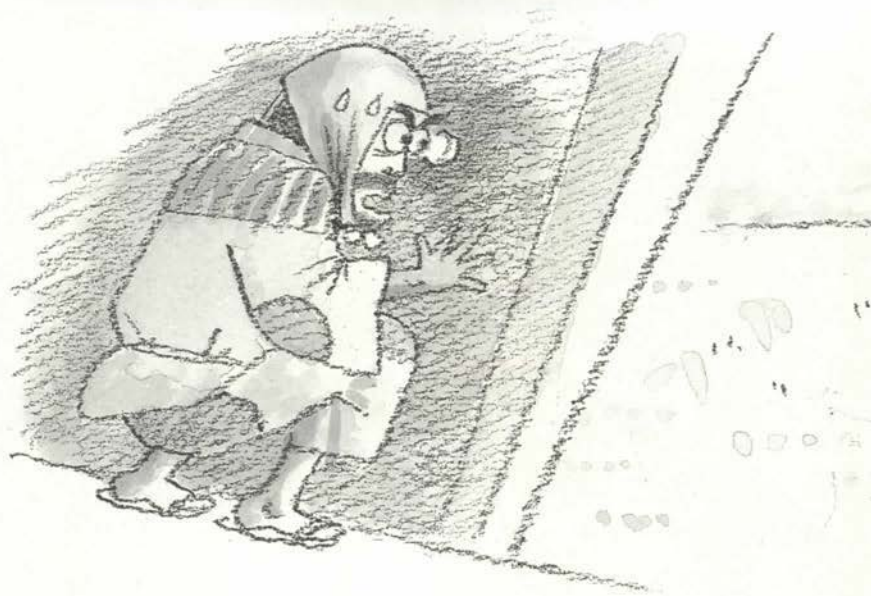
「おんちよろちよろ出てこれそろ」と言わしたちゆうもん。そしたら盗人はびっくりして、そろつと穴からのぞいてみたところが、こんどは「おんちよろちよろ穴のぞき」て、婆さんの言わしたもんじやけ、盗人はいよいよたまがつて「俺が穴からのぞいたことまで知つとるばい」と、ひとり言を言うたちゆうかん。今度は婆さんのほうでは「おんちよろ



ちよろ何やらささやき申しそろ」と言わした
もんで、盗人はいよいよびっくりして、こん
な家に入ろうものならこちらの命が危いと思
うて、そろそろ帰ろうとすると、またまた「お
んちよろちよろ出ていかれそろ」というもん
で、盗人は大慌てにあわてて、逃げて帰った
というこつたい。

これはひろく全国に伝わる「鼠経」という話
で、例話としてあげたのは熊本県本渡市に伝わ
るものである。亡き夫をしのぶ老妻の、疑うこ
とを知らぬ心が伝わってくる。このような無心
さが仕合わせにつながる、民話はかく私たちに
伝えているように思う。

民話のふところは深い。短い紙数では書き尽



くせないものがあるが、もう一つ、民話から私
が受取った古いへの救いを記してみよう。ただ
その前に、民話の定義という固くもなり、大
袈裟であるが、私どもは民話とは、昔話、伝説、
世間話などのほか、現代の民話をも含めて考え
ている。民話とはただ単に遠い昔から語られた
ものをいうのではなく、ひとが生きて存在する
限り、ふつふつと生まれるものなのだ。

さきほど記した岩崎としるさんの選挙のとき
「おらあ奥歯だ」と言って運動員をけむに巻い
た話など、現代の笑い話に入るものである。

私が二十代で木下順二氏の提言である「現代
の民話」という精神にふれ、以来、いつの日か
集めたいと念じ、民話の会の機関誌を通じて全
国によびかけ集めはじめてから早いもので二十



年の歳月が流れた。今、単行本として十冊目で刊行中である。河童・天狗から学校の怪談、軍隊、銃後、ラジオテレビ局の笑い、と怪談、などなど。

驚いたのはその中で死者からのサインが多いことであつた。意を決して『あの世へ行った話・死の話・生まれかわり』を一巻、『夢の知らせ・ぬけだした魂』を一巻、集め、上梓した。

すると、ある会合の席で「先生、オカルトにならないでくれ」と言われた。秋田県鹿角の青年であつた。私はオカルトと無縁よ、民話としてあの世の話や死者からのサインを集めているのと説明した。彼の周囲には、そうした不思議が日常茶飯事で、だからこそ心配なのだという。わあ面白い、その話聞かせてとねだつて、して

もらった。彼の祖母が死んだとき、従兄弟が知らせに早朝きた。母のところにいつて伝えると、とつくに知っていた。祖母がおれは死んだぞといいにきたという。人が亡くなった家ではとりこんで、朝飯どころでねえから、台所へいつて電気釜のスイッチ入れてきた。もう炊けているころだといつて電気釜ごと風呂敷に包み、車にとびのつて亡き母親の許へいつたという。青年の母親は結核を患つてから台所へ立つことはないうで、それだけに家の者は驚いたという。

死

者が自らの死を知らせにくる。また死に瀕した人があの世へ旅立とうとするとき、死者の出迎えをうける、こうした話は枚挙にいとまがない。

そして私の心をなぐさめるのは、多くの人び

とに共通した風景として、死への道は美しい花野や川であることが多いことである。

花野の果にはきれいな川が流れて舟がいつぱい浮んでいて、近いような遠いような花いつぱいの野中の道を一人で歩いていた。と、はるか後ろでおろぶ声が聞こえてきよつた「オーイ、行つたらいかんきに、早う戻れ、オーイ行くなよ、皆待つちよつきに」

ふりむいたら義兄が駆けよつてきて手を取りあうたと思うたら生き返つた……。

高知の話である。数限りない語りのなかで私は、私ももしかして美しい花野を越えてあの世へいくのかと、心が和むのである。

(作家)



●前号までの利根川裕氏のページに、今月号から演劇評論家の関 容子氏が登場いたしました。関氏にはこれまで八代目松本幸四郎夫人に聞いた名優の素顔や堀口大学、戸板康二らとの交遊を描いた「おもちやの三味線」や「中村勘三郎楽屋ばなし」や、昨年一月刊の「役者は勘九郎—中村三代」といった数々の演劇エッセイ集（いずれも文藝春秋社）があります。「浄土」の読者の中には歌舞伎ファンもたくさんおられるとのことですので、関氏の話にしばらく耳を傾けて楽しんでいただきたいと思います。

●エッセイといえば吉川英明氏の「午後の日射しの中で」も、早いものでもう九回目を数えました。父君英治氏ゆずりの平明な語りくちが快調で皆さんの好評を博しております。とりわけ、時折、文中に出てくる英明氏自身のタンカは久しぶりに聞く江戸弁が多く、同じ江戸っ子の私などもつい頷いてしまったりもいたします。また、今月号の「煙が気に障る」も、どちらかといえばヘビーに近いスモーカーの私にはまことに耳の痛いかぎりです。もっとも、私は吉川氏と違って禁煙の意志などさらさらありませんので、今度吉川氏にお会いする機会には、ことさら紫煙をたなびかせてケムに巻く所存ではあるのですが。

●現代の快僧その七「山谷、寿町に飛び込め」の真言宗報恩寺住職、鹿野融

照さんの生き方に感動したという声がたくさん寄せられました。五十人のボランティアによる総勢千人分のカレーライスを喜捨する鹿野氏の生き方を稲葉小太郎氏は見事なルポで伝えてくれましたが、文字どおり快僧にふさわしいお一人であつたと思います。稲葉氏には今後ともぜひ精力的な取材をお願いしたいと思っております。

●八月の九日に、大学生の娘と二人で能登半島を観光バスで巡りましたが、金沢を発ってほどなく富米の海辺を走りまわりました。ややつて能登の志賀原発も目にし、ああ、ここが、と思い当たったのが先月の「旅」に出てくる阻止運動の中心人物川辺茂さんのことでした。それから旬日して、裁判で川辺元漁協組合長らを中心とする原告敗訴のニュースが伝えられました。結果の当否は別として、筆者の夏牧吾氏が問題を提起したところに本誌の「旅」のページに特色があつたのも思いいます。

●九月の初旬でもまだ暑さが続いております。それから水不足も。皆さまのご健勝を祈ります。

(編集チーフ 小川有順)

編集スタッフ 栗田順一

齋藤晃道

長谷川岱潤

編集室

村田洋一

太田正孝

石上俊教

●お詫び
八月号冒頭ページの人物紹介で、しげた・ますみ、アリエウス、会長とありましたが、しげた・しんちよう、アリエウス、理事長の誤りでした。ここにお詫びし、訂正させていただきます。また右ページの写真説明にカンボジアとありますが、ブータンの誤りでした。訂正しお詫びいたします。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受け付けております。ただし、採否に関しては編集部にご一任ください。また、原稿は原則として返却いたしませんので、必要の方は必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていただいた方には規定の稿料を差上いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありますらご遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部

浄土

六十巻 十月号

年金費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成六年九月二十五日

発行 平成六年十月一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社 文化カラー印刷

写真補字 文化フォトタイプ

〒一〇五東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三七八六九四七

FAX 〇三三三七八七〇三六



S★PPORO

私たちは味わいライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリー-half〉



サッポロ生ビール カロリー-half

飲酒は20歳をすぎから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

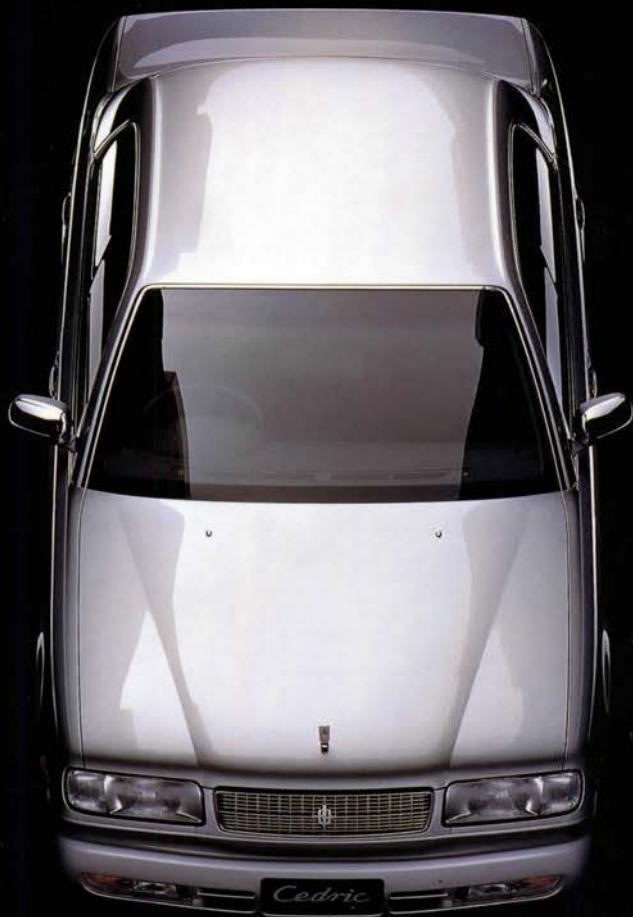
LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を選ぶ最大の基準は、その姿とかたちである。
つくり手の強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿がいい。かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO:セドリックV30 ツインカムターボ プロアム

な装備 ●VG30DET (V6 ツインカムターボ・総排気量2960cc) エンジン ●最高出力255PS/6000rpm (※NET値) ●最大トルク35.0kgm/3200rpm ●フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT) (※NET値) とは、エンジンを車間に搭載した状態とほぼ同等条件で測定したものです。日産自動車株式会社お客様相談室 ●全国共通フリーダイヤル0120-315-232 お近くのローレル販売会社へ。



S★PPORO

私たちは味わいライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリーハーフ〉



サッポロ生ビール

カロリーハーフ

飲酒は20歳をすぎから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

人間のやさしさをクルマに。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を築く最大の基盤は、その姿と、かたちである。
つくり手の強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿がいい。かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO:セドリックV30ツインカムターボ プロラム
VIP ●全長4800×全幅1745×全高1410(%)主

な装備 ●VG30DET(V6ツインカムターボ・総排気量2960cc)エンジン ●最高出力255PS/6000rpm(※NET値) ●最大トルク35.0kgm/
3200rpm ●フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT)(※NET値)とは、エンジンを車両に搭載した状態とほぼ同等条件で測定したも
のです。日産自動車株式会社お客様相談室 ●全国共通フリーダイヤル0120-315-232お近くのローレル販売会社へ。